
金の減る箱

山羊ノ宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金の減る箱

【Nコード】

N6926I

【作者名】

山羊ノ宮

【あらすじ】

「いや、そんな箱いらないから」

「そうだよな。俺もそう思う」

あるところにコーエンと言う裕福な男がいた。

ある日友人からお金が増える箱を譲り受けたコーエンは、次はお金の減る箱とやらをいらないかと友人から打診されていた。

「いや、そんな箱いらないから」

「そうだよな。俺もそう思う」

あるところにコーエンと言う裕福な男がいた。

ある日友人からお金が増える箱を譲り受けたコーエンは、次は金
の減る箱とやらをいらないかと友人から打診されていた。

「じゃあ、何で持ってきたんだよ」

「気になるだろ。昨日お金を入れておいたのに翌日になっ
たら消えているんだ。何かあるって思うだろ。普通」

「思わない」

「そうか・・・」

「それで何かあったのか？」

「何も・・・」

「だろうな」

「だろうなって、何か知っているのか、お前」

「いや、何も。と言うか俺に聞くよりもその箱にいる小人に聞いた
らどうなんだ」

「小人？」

「出てこなかったか？小人が。金が増える箱を貰った時には出てき
たぞ」

「出てこなかった。一度も。なぜ？もしかして俺小人に嫌われてい
たのか？それとも他に理由が？」

「たんに入れたお金が多かったら出てくるとかじゃないのか？」

「そうかもしれない・・・コーエン、今すぐこの箱にお金を入れて
くれ」

「嫌だ。そんな金をどぶに捨てるような真似出来るか」

「そこを何とか。一生のお願いだから」

「その台詞聞き飽きたぞ。お前の一生は何回あるんだ？」

「あと五十二回ほどあるな」

「お前なあ・・・」

「じゃあ、その箱頼んだからな。お金を入れて小人が出てきたら、その箱が何でお金を入れるとお金が消えるのか、理由ちゃんと聞いといてくれよ」

そう言つてコーエンの友人は半ば無理やりにその箱を押しつけた。それから幾日経ったある日、コーエンは酔っぱらつて帰ってきた。そして、いつも通りお金の増える箱の中にお金を入れる。つまりだった。

何をどう間違えたのかは知らないが、コーエンがお金を入れたのはお金の減る箱だった。

そして、翌日その事実によりコーエンは頭を抱えるのだった。

「まあ、これできつとお金の減る箱の秘密が分かるのだから・・・」とコーエンは自分を納得させようとするが、まるで興味の無いコーエンからはため息しか出てこない。

しばらくすると箱から小人が出てきて、箱の上に筒のようなものを取り付け始めた。

コーエンはやつと出てきたかと腰を上げ、小人に話しかける。

「ちよつと君、一つ聞いてもいいかな？」

「は、はい。な、何でしょうか、コーエンさん」

突然話しかけられてびっくりしたのか、それとも何かやましいことでもあるのか、小人はびくびくしていた。

「この箱は何でお金を入れるとお金が減るのかな？」

「そ、それはですね・・・」

それから小人はいかにお金が減るかの仕組みを詳しく説明してくれたが、コーエンには少しも理解できなかった。

分かったことと言えば、その消えたお金で何かを研究しているというくらいであろうか。

けれどもその研究内容については、ダークマターがどうだこうだと言われても、コーエンは理解できなかった。

「その何かよく分からない、役に立つかも分からないものの研究に俺の金は使われたということだな」

「えっと、どう説明したらいいのかな。だからですね。この世界の成り立ちを研究していて、クウォーツとか反重力物質とか・・・」
「いや、もったいない。説明してもらっても分からないから。それにもうこの箱にお金を入れることも無いと思うから」

「そ、そんなあ。それじゃあ研究が滞ってしまいます」

「仕方ないだろ」

コーエンの冷たい一言にしょぼくれる小人。

その並々ならぬ哀愁漂う姿にコーエンは少し憐れんでこう続ける。

「まあ、釣り銭が多くて困った時ぐらいに小銭ぐらいなら入れてやらんでもないが・・・」

「本当ですか!!」

一転して喜々とする小人の姿にやれやれと頭をかくコーエンであった。

それからまた幾日か経った日の朝。

「大変です!大変なんです!コーエンさん!」

「ん?何だ、朝っぱらから」

「研究の結果、大変なことが分かったんです。この世界が滅んでしまっんです」

「は?何だって?」

起き抜けの頭に衝撃の事実がコーエンの頭を揺さぶることはできなかった。

コーエンは眠たい眼をこすり、あくびをして、ぼんやりと小人を見つめた。

「世界が滅んでしまっんです!三百年後に!」

「世界が滅ぶ?」

「はい。大変な事態です」

「三百年後に?」

「はい」

「あのさ、俺もうその頃死んでるし、全く関係ないと思うけど?」

「え……っと。そ、そう言われれば、そうですね」

「……やっぱ役に立たなかったか」

「すみません」

そう言ってしよくれた小人を見、コーエンは昨日飲み屋でもらったわずかばかりの小銭をお金の減る箱の中に入れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6926i/>

金の減る箱

2010年10月28日06時09分発行